慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	同定と属性付与構文再考
Sub Title	Réexamen de la construction identificatrice/attributive en français
Author	川口, 順二(Kawaguchi, Junji)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1991
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.59, (1991. 3) ,p.170(271)- 183(258)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	大濱甫教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00590001-0183

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

同定と属性付与構文再考

川　口　順　二

0．緒言

川口（1987）で次のような構文を問題にした。

(1) Je reconnus en elle Miss Ginch

(2) Je vois en vous un homme intelligent

この構文の特徴を簡単に言うと，主語にあたる人（これをZと呼ぶことにする）がある人（これをXとする）についてそれが誰（以下Y）であるか，またはそれがどのような性質（同じく以下Y）を持つかを判断するという解釈を持ち，したがって背後に「XはYである」という関係を含んでいることである。ここでZは判断主体としての人であり，またXとYは人を指すという条件を付けてある。このXとYについての条件はこの構文を考える上で重要なもので，この点については後で簡単に触れる。前掲論文では（1）のタイプが同定を，（2）のタイプが属性付与を表す構文であることを示した。本稿ではその後収集したデータを基にいくつかの修正を加え[1]，より全体的な考察を提示する。

1．構文特性

「XはYである」，つまり<X ETRE Y>という関係を維持するために，（1）や（2）を<Z V Y en-X>と表記する。またVは reconnus, vois など判断にかかわる動詞である。Vはこの他に後述するように感情などを示すことがある。Vを否定することは出来るが，その場合は対応するETRE 構文と同様，すでに構築された関係を否定するという解釈になる。

例えば次の：

(3) Je ne reconnais pas en lui Jean-Pierre

は，ETRE 構文の

(3') Lui, ce n'est pas Jean-Pierre

と同様に<Lui ETRE J.-P.>という関係が既に作られていて，préconstruit としてのステータスを持っている。同じく属性付与タイプでも：

(4) Je ne vois pas en lui un homme rusé

は，(4') Lui, ce n'est pas un homme rusé と平行して，<Lui ETRE un homme rusé>という préconstruit が想定される。即ち既にディスコースの中でこのような関係を構築したか，発話者以外の主体がこれを構築したか，のようなケースである。なおYの限定辞としての不定冠詞 un は否定文の中でも必ず保持される。

疑問文を作ることも可能である。全体疑問では：

(5) Reconnaît-il en lui Jean-Pierre?

(6) Vois-tu en lui un homme rusé?

のようになるが，否定文の場合と同様に<X ETRTE Y>という関係が préconstruit のステータスを持つ。

部分疑問にはいくつかの拘束がある。en-X は en qui? となるが，où の疑問文は異なった解釈となる。つまり：

(7) En qui as-tu reconnu Jean-Pierre?

では，<Toi reconnaitre J.-P. en-X>という préconstruit があり，このXの同定を求めているが，

(8) Où as-tu reconnu J.-P. ?

では，事柄の成立した場所を問うている。

Zは Qui? で良いが，属性付与文の場合は Que? となりそうに見える。これは対応する ETRE 構文が Qui est-ce qu'il est? と共に Qu'est-ce qu'il est? の両形を持つことと平行した現象である。Qui est X? という疑問文が同定を問題にしているのかそれとも属性付与を問題にしているのかについ

て曖昧であることは良く知られている。ところが：

(9) Qu'est-ce que tu vois en lui?

は Qu'est-ce qu'il est? と比べて必ずしも同じタイプの疑問文とは言えない。というのも Que? は疑問の対象を人に限定することが出来ず，従って：

(10) Il rencontre alors Esther, en qui il vit une agréable perspective de s'enrichir (Christie, *Major*: 180)

のようにYが抽象名詞であるケースを排除できない。と言うより寧ろこの様な解釈が自然であろう。この点 Qu'est-ce qu'elle est? はElle est une agréable perspective de s'enrichir のような答えがより特殊なものであり，しかも（10）とは解釈が大きく異なることで対照的である。

Yが抽象的な性質を述べる名詞句では<X ETRE Y>の関係を保持することが必ずしも可能ではない。例えば：

(11) Ses yeux étaient plus timides que faux et *les habitudes déplaisantes que Bill avait constatées en lui*, celle par exemple de se ronger les ongles, parurent à Bundle être causées plutôt par la nervosité que par tout autre motif (Christie, *Cadrans*: 123)

はパラフレーズとしては<il AVOIR des habitudes déplaisantes>のように AVOIR を用いることになる。また ETRE を用いるならば<Y ETRE en-lui>のような形になる筈だが，Yに付く限定辞やの制約などにより，常に可能とは言えない。ETRE よりはSE TROUVER の方が自然だし，また en よりは chez の方が一般的だろう。

2．意味解釈の諸問題

2．1．XとYとの関係

<Z V Y en-X>の構文に付いて次のような仮説を立てよう。XとYとの関係はYがXに定位される（Y est localisé par rapport à X）ことにある。即ち発話空間の中で，YはXに依って始めて安定した値を持ち得るの

であって，X無くしてはYが「宙に浮」いてしまうのである。

発話活動とは何らかの関係を発話原点に関して定着させることに究極的な意味がある。発話状況に依存する様々なマーカーの存在はそれ自体このことを示唆している。例えば人称代名詞，名詞限定辞，テンス・アスペクト，感情・評価の諸表現など，全てが発話原点に位置する主体と場に関わって始めて解釈可能になるのである。このような観点は E.Benveniste がつとに提唱した言語の発話分析の根底にあり，フランスでは A.Culioli を中心に進められている言語活動研究の基盤になっている。

例えば ETRE を取ろう。X，Yがいかなる項であろうとも，<X ETRE Y>は「XについてXがYに定位される」という関係を示す。Pierre est un étudiant ならば「Pierre について，Pierre という項を étudiant という集合と関係付け，Pierre がこの集合の任意の項，つまりこの集合（classe des étudiants)の中のどの項(un quelconque)を取り上げてもPierre と同定される項(un auquel est identifié Pierre）と質的に区別されることの無い，そのような項との関係付けに依って Pierre を定位する」ということになる。その場合XやYそれぞれが対象となっている数量・限定操作，またX，Yの語彙特性等が重要なパラメーターとして介入してくる。ETRE 構文に付いての研究は尽きることがなく常に様々な論文が発表されているが，これは正に言語活動の中心である定位という操作の多様性を反映している。

この様な観点から<Z V Y en-X>を考えると，ETRE 構文と異なる点に気づく。即ちXとYとの関係がより複雑な点である。再び Pierre est un étudiant という文を取ろう。Je reconnais en Pierre un étudiant はこれだけでは曖昧である。つまり（i)「P. が知っている学生の一人である」（同定)，(ii)「P. の振る舞いからして彼は学生であるに違いない」（属性付与)，という二つの解釈が可能で，しかも（i) の解釈には条件が付く。つまり「知っている学生のうち一人」であるためには前もって「知っている学生」の集合を構築して置かなければならない。このような解釈制限は ETRE 構文には見られない。(ii) の解釈も ETRE 構文に自然なものではな

い。それもこの様な解釈を持つためには Pierre doit être un étudiant のように発話主体（これをＳと呼ぶことにしよう）の推量を明示的に示す必要があるからである。いわゆる evidential のマーカー[2)]が介入するのである。上例の devoir では推量の根拠を明示する必要が無いが，à ce que je vois, à mon avis のようにこれを明示することも可能である。

２．２．ＺとＶについて

<X ETRE Y>と<Z V Y en-X>との間に認められる上に述べてきたようなＸとＹとの関係の違いのソースはどこにあるのだろうか？　当然二つ目の構文に現れるＺとＶにこの問題の鍵が求められる。この二つの項の夫々について考えてみよう。

２．２．１．Ｚ

まずＺだが，これは判断主体である。当然人でなければならない。次の例ではＺが une ville となっているが，これは当然人で構成される社会集団を指す：

(12) *Une ville*, en particulier, voit en lui son sauveur providentiel: Tyr, que les Franj assiègent à nouveau malgré la capture de leur roi. (Maalouf, *Les croisades vues par les Arabes*: 119)

Ｚについては次のような問題が出てくる。即ち判断主体はＸとＹとの間に関係を打ち立てる主体だが，これは発話主体Ｓと同一であるとは限らない。例えば次の例を見よう。

(13) ——Elle m'a parlé d'un homme au regard qui, disait-elle, ne trompait pas, Elle l'avait remarqué, ce regard, alors que l'homme en question s'entretenait avec Humbleby et c'est pourquoi *elle voyait en Humbleby la prochaine victime*.
——*Elle voyait juste*. (Christie, *MeurtreFacile*: 146)

「だから彼女は Humbleby が次の犠牲者だろうとおもったのだ」は報告文である。話者１は第三者 elle の語ったことを話者２に伝えている。それに対して話者２が Elle voyait juste と言ってその判断が正しかったことを確認している。判断主体Ｚはここに現れる二人の話者の何れとも同定されな

い。

しかしこの例ではZがXとYの関係樹立のソースであろうことが想定できる。ところがより複雑なケースが存在する：

(14) —— Certes, le comte de la Roche est un compère; jusqu'ici il a glissé a travers les mailles du filet de la justice. Mais *il va trouver son maître en la personne d'Hercule Poirot*. (Christie, *Le train bleu*: 146)

Zは詐欺師の comte de la Roche であり，この文の話者は H.Poirot 自身である。後者は判断内容をZが認めざるを得なくなるだろうと予測し，このような関係の成立を実現させる意志を表明している。XとYの関係のソースは発話者ということになる。

この例は属性付与タイプで，Yの son maître は指示的に機能しているのではない。いわゆる utilisation attributive である。パラフレーズすると (Je vais faire en sorte qu') Il va avoir *un maître*, et (qu') il va trouver que H. Poirot est ce maître とできる。同定タイプでも Il va reconnaître en elle Miss Ginch のような文を考えられる。但しこの場合は，芝居での役者と登場人物との関係のように「変装」のコンテクストでない限り，XはZであるという関係は既に確立したものであり，従って既に成立している関係のZによる認識という解釈になる。

以上の考察からXとYとの関係は前に述べたように préconstruit，既に構築された関係であることが確認される。そしてこの関係構築のソースはSであることも，Zであることも，またはSでもZでもない別の主体であることもありうる。この最後のケースは次の例にあらわれる：

(15)—— Ce n'est pas l'air balourd qui me déçoit, mon ami. Je n'espère pas trouver en un directeur de banque, un《financier alerte a l'œil perçant》*comme le dépeignent vos romanciers favoris*. (Christie, *Enquête*: 103)

XとYとの関係は vos romanciers favoris が構築したものであり，ZはSと同定されているが関係構築の主体ではない。Yに付けられている引用符が

このことを明示している。

2．2．2．V

次にVの問題を見よう。川口(1987) ではVの調査の必要性を示唆するに留まったが，その後得られた結果を纏めておくことにする。

2．2．2．1．三種類のV

まず同定タイプと属性付与タイプはその一方にしか現れないV，両方に現れるV，という三種類のVがある。この内後者が最も一般的であり，reconnaître, voir のように頻繁に用いられるものがある。前者はかなり限られているようである。同定タイプ特有と思われるものには identifier がある。deviner は en-X の形を取る時は属性付与タイプが多いが、

(16) Il ne faudrait pas qu'il devinât M. Lupin *sous* M. Nicole (Leblanc, *Cristal*: 311-2)

のような例もある。

当然のことながらYの限定がこの問題の鍵となる。不定冠詞 un を用いると Il a deviné en elle une fleuriste のような文が考えられるのだが，これは「彼は彼女の振る舞い（例えば花の生けかた）を見て花屋だと見破った」のような解釈となる。即ち fleuristes の集合を構築し，問題の女性がそのメンバーであることを見て受け取ったわけで，集合の中で他と区別された「どの fleuriste か」ということは問題にされない。他のメンバーと区別されない un quelconque の解釈で，ここから集合への付属の性質が介入して樹立されるのである。これを単に同定タイプと呼ぶことは無理だが，かと言って属性付与タイプとしてしまうと評価的要素が文中に現れていないために問題が残る。このことに付いて後で考察の対象にする。

deviner のかわりに reconnaître 用いるともう一つの解釈がでてくる。Il a reconnu en elle une fleuriste は fleuriste の部分集合の1メンバーとして解釈されるケースであり，コンテクスト無しでは分かりにくいが，une fleuriste du quartier のような限定を加えると，明確になる。これは明らかに同定タイプの解釈である。

2．2．2．2．SNの utilisation attributive

属性付与の解釈には一群の特殊なケースがある。次の例を観察しよう。

(17) Caroline Crale, elle, se serait tout aussi bien éprise d'un employé de banque ou d'un courtier d'assurances. *En Amyas, c'est l'homme qu'elle aimait, et non pas le peintre.* (Christie, *Cochons*: 42)

ここでの l'homme はZの Amyas がそうであるところの l'homme では無いことがコンテクストから明らかである。「総称」と言うのも少し無理がある。L'homme est mortel と言う時は「全ての人間」だが，(17) は「全ての男性」の解釈ではない。「Amyas という個人を男性として愛した」のではない。次の例も同様の解釈となる。

(18) Elle est assez vieux jeu, je crois, et méprise en moi *l'homme arrivé par ses propores moyens.* (Christie, *Trois énigmes*: 230)

(17)—(18) に現れる定名詞句は utilisation attributive である。[3] この問題の解明には次の例が参考になる。

(19) Il s'est habitué a l'idée qu'il n'étudiait l'homme qu'en Montaigne. (Faguet, *Seizième siècle*, ap. Gougenheim (1970): 64)

この例では l'homme は「人間というもの」の解釈で，「Montaigne を通して一般的に人間を研究する」という意味になる。(17) の「男性を Amyas の中に愛する」という解釈と異なる点は，XとYとの関わりあい方にある。即ち (17) のYはXのもつ様々な属性を対比させ，この属性の集合の中の一つを取り上げる。パラフレーズとして Elle l'aime en tant qu'homme が可能なのは，集合のメンバーが性質によってお互いに区別されているためである。このことはまた en-Xの文中での位置にも関わる。En Amyas が文頭に出ていることにより，<elle aimer l'homme>という関係内の l'homme が Amyas にその有効範囲を束縛されている。(19) ではまず対比の対象がXである。これは ne … que による除外構文の特性である。一般に U ne V que W 構文では<U V E>のような関係を成立させ得るEの集合の構築が必要である。例えば<Crale aimer E>でEに代入さ

れて関係を成立させるようなEの集合を構築する。この集合は必ずしもそのメンバーがすべて知られているものである必要はない。次にこの中から一つの項を選び，それ以外の全ての項を排除する。ne … que 構文には様々な構文特性があるが，以上述べたことが基本であろう。(19) での対比の解釈は<Z n'etudier l'homme qu'en-E>の形を持ち，集合Eから Montaigne を取り出してそれ以外の項を排除することから出てくる。他方 en-X の文中での位置は文末だが，これを前に出して (17) のように対比を l'homme にかけると，En Montaigne c'est l'homme qu'il étudiait のような文になる。これは「人間 Montaigne の中で研究していたのは人間である」，つまり「思想家でもなく作家でもない」というような解釈であり，(17) と全く同じである。

文中での en-X の位置，ne … que や c'est … que による焦点化という二つの要素はXまたはYにかかる対比の効果を明示化する機能を持つもので，これが (17)—(18) や (19) の解釈を可能にしているのである。一般に判断に関わるV以外の，aimer とか étudier などのVが<Z V Y en-X>構文に出てくる場合はこのようなケースであると思われる。

2．2．2．3．動詞 Saluer について

興味深い例に次の (20) がある。

(20) [PoirotがHastingsに] Je ne désire pas saluer en vous *un second et inférieur Poirot*, mais *l'incomparable Hastings*. Si! si! vous êtes incomparable! En vous, je retrouve le modèle parfait de l'homme ordinaire. (Christie, *Couteau* :101)

Yが二つ対比されている例で，両者とも形容詞がついて冠詞を伴った固有名詞である。ここでVに注目しよう。

Saluer は*Petit Robert* で：“Fig. *Saluer qqn comme… saluer en lui…* : honorer, proclamer (qqn) en lui reconnaissant un titre d'estime, de respect, de gloire. *Etre salué comme un précurseur. Je salue en lui notre maître*” (s. v. *saluer*) という語釈を受けている。ポイントは en lui reconnaissant un titre d'estime…の部分で，「敬意を表する」行為と「尊敬

に値する称号を与える」行為とは切り放せないものである。<Z saluer Y en-X>でのYは評価の要素を必ず含んでおり，属性付与の用法のみを持つという点では先にみた étudier や aimer と同様である。しかし「称号を与える」の「称号」は決して公的な性格を必要とするものではなく，発話において提出される私的な性格のものでありうる。「XをYと呼ぶ」つまり「XはYであると認めてそれを表明する」ところに saluer の複雑さがある。

Saluer はパラフレーズとして"Z reconnaît X comme Y, ET Z exprime son respect envers X en tant que X est Y"という内容になる。(20) は始めの部分が Je ne désire pas saluer en vous un second et inferieur Poirot で，ここでは Vous n'êtes pas un second et inférieur Poirot を含意してる。「もう一人のしかもより劣った Poirot」という属性表現は様々な性質の Poirot の集合から任意のメンバーを抽出するので不定冠詞が現れている。後半のYの l'incomparable Hastings では形容されたYの唯一性から定冠詞が現れているが，これは次の例：

(21) Cette même Elsa Gree, le vieux Jonathan retrouvait en elle *la Juliette éternelle*! (Christie, *Cochons*: 42)

に出る固有名詞と同様の使い方である。Yに付けられる形容 incomparable, éternelle を通してYが一義的に決められるが，(20) の Si! si!, vous êtes incomparable が明示するように固有名詞に付与される形容はYを一つのタイプとしてそれに属性の解釈を与える。

3．同定と属性付与

これまで同定と属性付与の二機能を分離して考えてきたが，両者の間にはどのような関係があるのだろうか？　これを考えるためにYに付く関係節を観察し，ついで属性付与の特性に言及しよう。

3．1．Yに付く関係節について

まず次の例を見よう。

(22) Et tandis qu'elle parle, la porte s'ouvre devant quelqu'un qui

jette un coup d'œil dans la pièce et y entre. Patricia termine sa communication avec embarras et elle raccroche. Par simple précaution ou pour une raison plus précise parce qu'elle a reconnu dans la personne en question *celle-là même qu'elle s'apprêtait à nommer*? Les deux hypothèses sont plausibles. (Christie, *Vanilos*: 214)

これは同定タイプであり，celle-là même を先行詞とする関係節は制限的である。つまり celle-là がもつ指示値は関係節によってのみ決定されるのである。

これに対し，次の例はどうだろうか？

(23) Une autre fois, l'huissier était resté à la maison pendant trois semaines. Frances, qui était encore une enfant, avait trouvé en lui *un compagnon de jeu très sympathique, qui lui racontait toutes sortes d'histoires sur la petite fille à lui*. (Christie, *Flux*: 40)

この例は属性付与タイプであることは明らかで，関係節は非制限用法の機能を持つ。非制限的関係節は先行詞の指示値が関係節とは独立して確立されているとされる。(22) では<X ETRE Y>の関係が背後に認められるために先行詞 un compagnon de jeu très sympathique がl'huissier について語っていることは明らかである。ところで

(24) Pierre est un garçon très sympathique que j'ai rencontré hier

という文では関係節が制限的と解釈するのが最も自然だろう。それに対して

(25) Pierre est un garcon très sympathique qui me prête souvent de l'argent

では制限的なのか非制限的なのかが曖昧になってしまっている。(24) では「私が昨日会った人」が「昨日会わなかった人」と対比され，これが un garçon の指示値の決定に関与するが，(25) では「お金を貸してくれる人」が「お金を貸してくれない人」と対比させられるのか否かがこれだけ

では不明である。ところが très sympathique を取ってしまうと（23）は当然のこと，（24）さえもが制限的解釈となる。集合から抽出されるメンバーが性質形容を受けていない場合，関係節は制限的に解釈され易いのである。

très sympathique のような性質限定が付くと先行詞名詞句の限定度が高まり，関係節からの独立性が強くなる。そのために関係節に記述される事行が時空間で特定される事柄でない時 Fuchs(1987)が説くように brouillage が起こると考えられる。

（23）の関係節は非制限的で，très sympathique という形容に関与する。自分の娘の色々な話をしてくれたからこそXはこの形容に値するわけである。このように関係節がXの属性を示すYにつく時はこの属性に関与的（正当化）な内容を持つ。

書き言葉でのコンマの有無，話言葉で pause の有無が関係節の制限／非制限の区別に必ずしも有効でないことは言うまでもない。そこで（26）では

(26) Elle a vu dans miss Holland *une intrigante qui allait lui voler l'affection d'un homme dont elle n''etait pas digne*… (Christie, *Plume*: 250)

コンマなしにも関わらず，Y自体が性質を示す名詞で，（23）と同じタイプの関係節と考えられる。次の

(27) La vérite, c'est que, [……] quelque chose l'inclinait à croire cet homme dans lequel il n'avait vu jusqu'ici qu'*un rival détesté et qui proclamait si hautement, devant Florence elle-même, son amour pour Marie-Anne.* (Leblanc, *Tigre:* 245)

でも事情は同じである。

以上で観察されたことは同定タイプでは制限的関係節が取れるが属性付与タイプでは一般に非制限的な関係節しか取れず，又これがYの性質形容に関与的であるという点である。

3. 2. 属性付与の特性

(a) Pierre est gentil と(b) Pierre est un garçon gentil の間にはどのよう

な違いがあるのだろうか？（a）は集合を構築することがなく，gentil という性質評価が Pierre という主体について陳述されているだけである。それに対して（b）では garçons の集合構築があり，gentil という性質がその下位集合を規定している。この下位集合から任意のメンバーを抽出してこれを Pierre と同定することにより（b）が作られている。

属性付与タイプの<Z V Y en-X>構文のYが非制限的関係節しか取れず，しかもそれがYについての形容に関与的であるということは，関係節が非制限的であるにも拘わらずYが固体の指示という機能を充分に果たしていないからだと考えられる。これはYが定名詞句か不定名詞句かということと異なった問題である。そして（b）と同様に集合構築があることからYは名詞句の形を取る。

ところで問題の構文が同定タイプか属性付与タイプかの決定はX及びYの性質，そしてVの性質による。Vについてはいくつかの問題を2. 2. 2. で考察した。XとYとの関係は2. 1. で一般的な言及はしたものの，Xが総称的な場合(cf. (15))など細かく検討しなければならない。

4．結語

Franckel(1989)は発話文の定位について発話時空間に関わるタイプと発話主体に関わるタイプの二種類を想定している。voir や reconnaître では判断主体Zの中にこの二タイプの定位が埋め込まれている。この関係の解きほぐしは今後の課題である。

注

1）　前稿では Declerck (1983)に基づき同定タイプに D-identifying のと S-identifying のタイプと認め，<Z V Y en-X>には前者しかないと考えた。その後の調査でこの主張が誤りであることが明らかになった。これについては機会を改めて考えたいが，とりあえず S-Identifying の例を下に挙げて置くに止める。

(i) Helmut ne reconnaissait plus Ilse dans cette fille solide, qui

attaquait durement Hubner. (Exbrayat, *L'inspecteur mourra seul*: 242)

2) Kawaguchi & Koishi (1989) 参照。

3) 川口（1987）参照。

参考文献

FRANCKEL, J.J.(1989): "Du dommage engendré par les marqueurs grammaticaux", *La notion de prédicat*, Univ. Paris VII.

FUCHS, C. (1987): "Les relatives et la construction de l'interprétation", *Langages*, 1987.

川口順二（1987）：「「同定と」「属性付与」の一構文」,『芸文研究』, 51.

KAWGUCHI, J. & A. KOISHI (1989): "A propos de "il parait que"", *Equinoxe*, 51.

KLEIBER, G. (1989): "L'opposition massif/comptable et les adjectifs", in DAVID J. & G. KLEIBER (eds.) (1989): *Termes massifs et termes comptables*.